

芦北水俣郡市中学校体育研究会 研究主題
「わかってできる 保健体育学習の在り方」
～一人一人が考えをもって、仲間と関わりながら取り組む学習をめざして～

I 研究主題について

新型コロナウイルス感染症が全世界で拡大する中、7月には豪雨災害があり、芦北水俣郡市は大きな被害を受けた。研究の指定を受けたものの、臨時休校等もあり授業ができず、思うように研究を進めることができなかったが、保健体育学習の在り方についてあらためて考える機会となった。

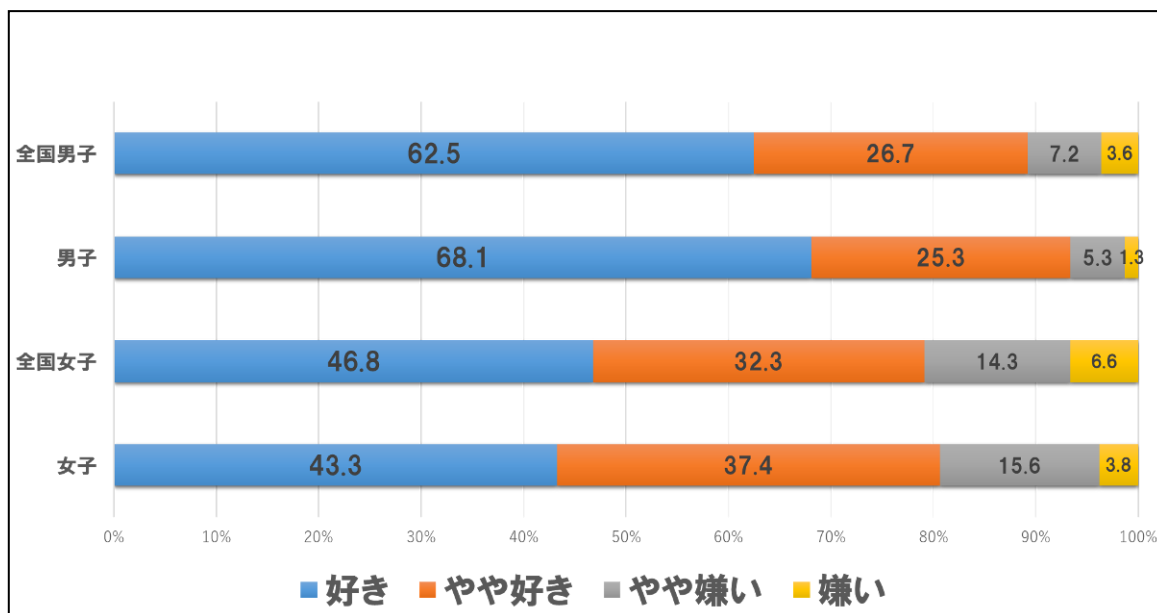
芦北水俣郡市は数年後には生徒数が1,000人を切ると予想され、県内で最も生徒数の少ない郡市であり、体育担当者も8校中7校が1名という状況である。そんな中でも毎年実施されている新体力テストでは多くの項目で県基準を上回り、運動やスポーツを好む生徒が多い状況である。これは生徒の一人一人に目が届きやすく、きめ細やかな指導が行われている成果であるとも言える。しかしながら、今後、今以上に生徒数が減り、集団の中で多様な考え方に触れる機会が少なくなることや、仲間同士で競い合う経験が少なくなことは、将来、社会に出て生きて働く力の質の低下につながるのではないかと懸念される。

そこで、芦北水俣郡市では、新学習指導要領が求める資質・能力の三つの柱について考え、学習する子どもの視点に立った授業づくりをスタートさせた。

保健体育の授業では、学習したことを実生活や実社会に生かし、豊かなスポーツライフを継続することが求められている。そのためには、生徒がその学習に対し「楽しい」と実感していることはもちろんのこと、生活の仕方や運動の行い方などの知識や、自分や友だちの課題に気づき、課題解決のための方法を考えて解決していく力が必要となる。しかし、体育科の授業で考えるならば、学習を苦手としている生徒にとってそのような力よりもできないことで体育の授業を苦痛と覚えることが優先してしまい、実生活や実社会に生かすことができない状況に陥りがちである。つまり、運動の機能的特性の楽しさを感じさせながらも、「できる」喜びを経験させることがスポーツライフの素地を培う授業だと考える。そこで、まずは発達段階を踏まえ、学習したことを実生活や実社会に生かす力を育むために、仲間と関わりながら「わかる」ことをより大切に、「できる」喜びも実感できる学習の展開を工夫していくこととした。また、「できる」喜びには仲間との関わりが不可欠であり、一人一人が考えをしっかりと学び合いを行えばさらに学びの質は深まると考え、仲間と深く関わり合えるような手立てを工夫していくことで、生活に生かす力や技能の高まりへも繋げられる授業をめざした。

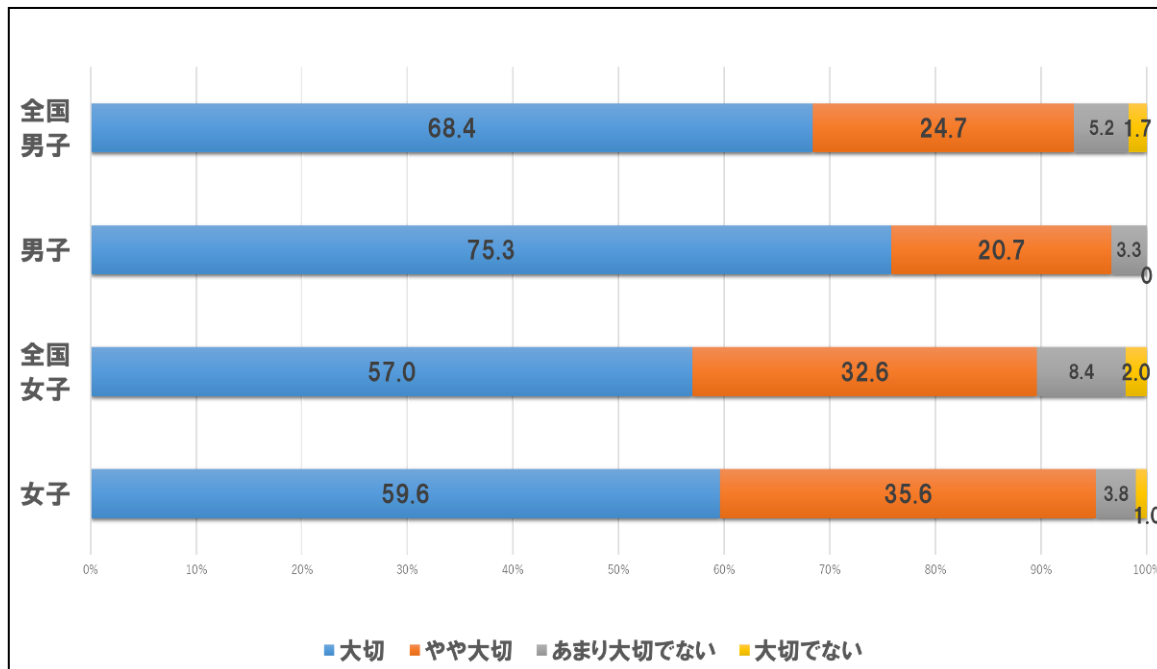
II 芦北水俣郡市の実態から

【資料1】運動やスポーツをすることは好きですか



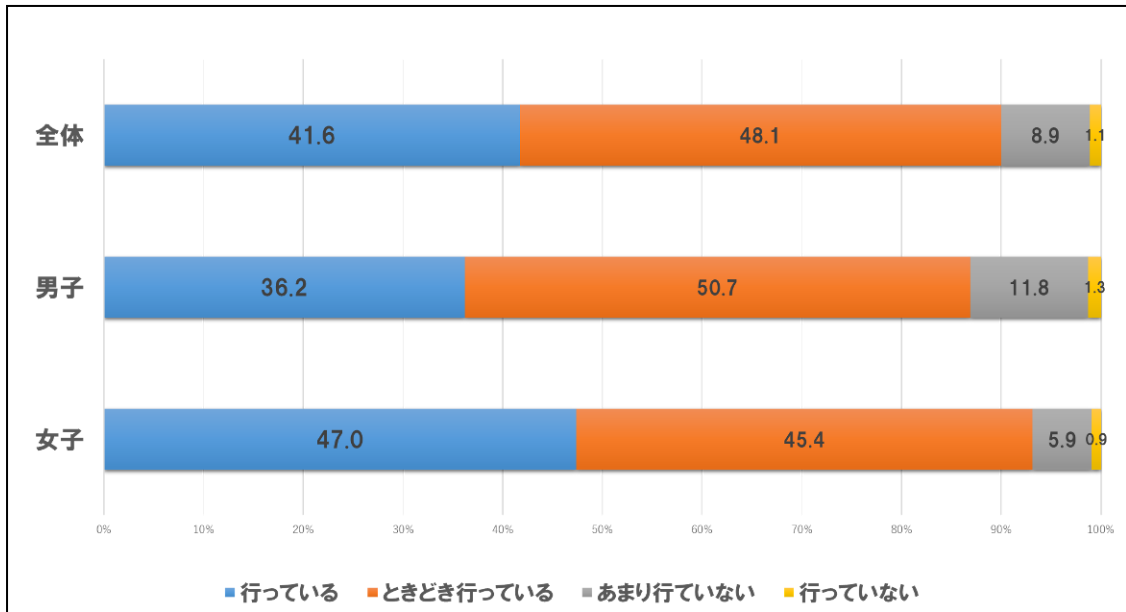
令和元年度「全国体力，運動能力，運動習慣等」調査結果である。男子が約93%，女子の約80%が肯定的な回答をしており，全国よりもやや高い傾向にある。

【資料2】運動やスポーツは大切だと思いますか



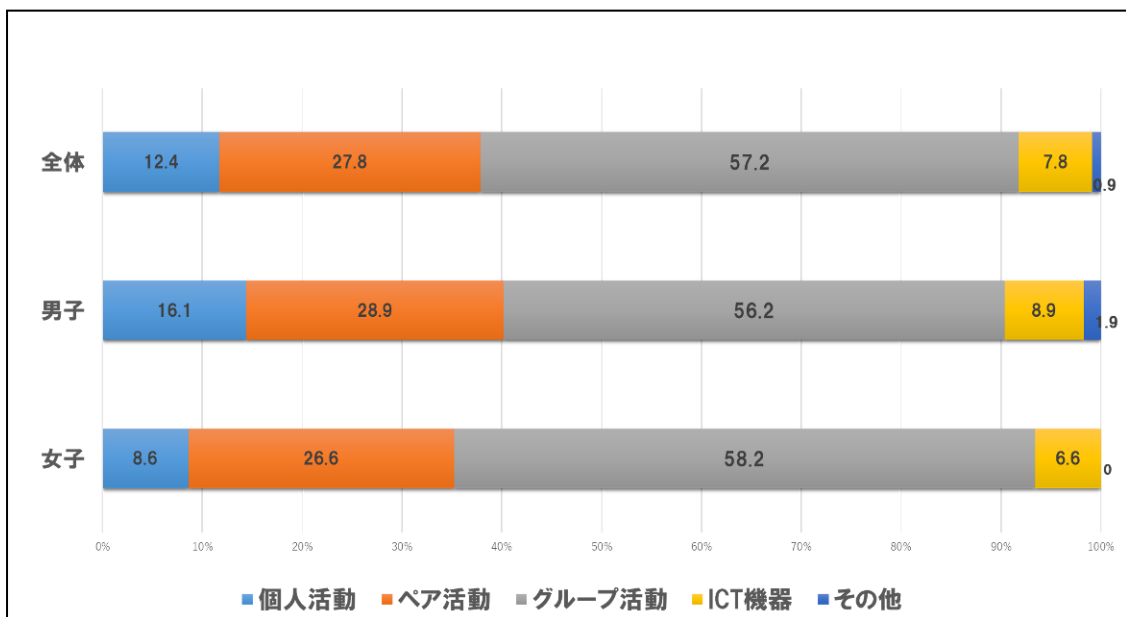
男女ともに約95%が肯定的な回答をし，全国と比べても高い結果となった。

【資料3】運動を行う際にポイントを理解して行っていますか



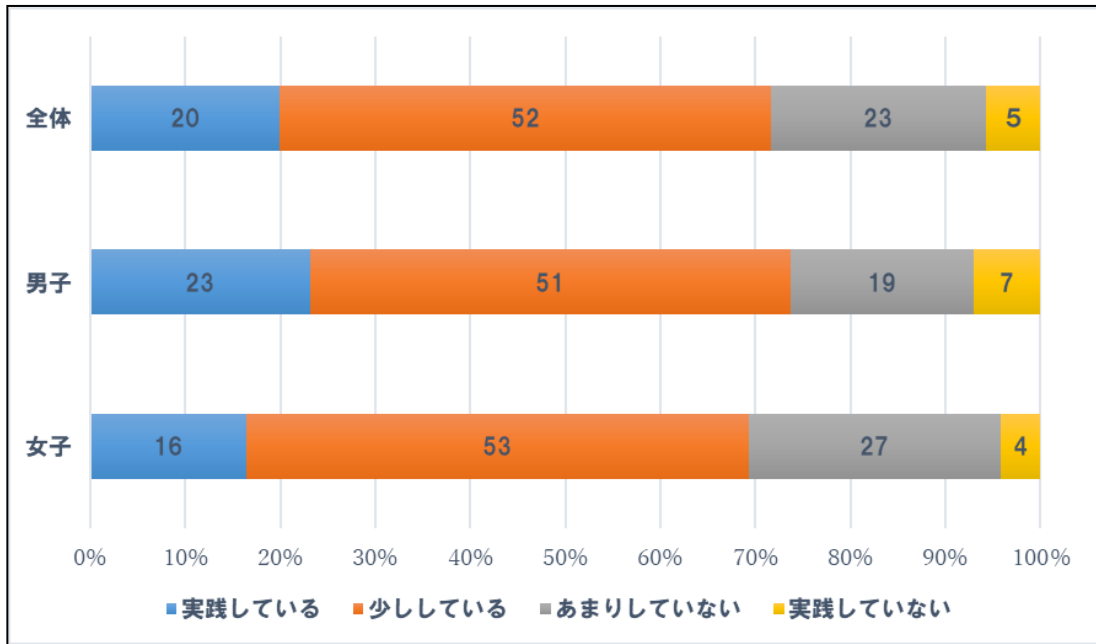
本郡市8校の生徒に実施した、保健体育の授業に関するアンケートの結果である。男子が約86%、女子の92%が肯定的な回答をしている。しかし、期末テストの結果や学習カードの振り返りを見た時に疑問が残る。「生徒たちがポイントを理解したと考えるのはどのレベルのことを言うのだろうか」「もしかしたら理解できたつもりでいるのではないか」という意見が授業者から多く挙がった。

【資料4】保健体育の授業に必要なものは



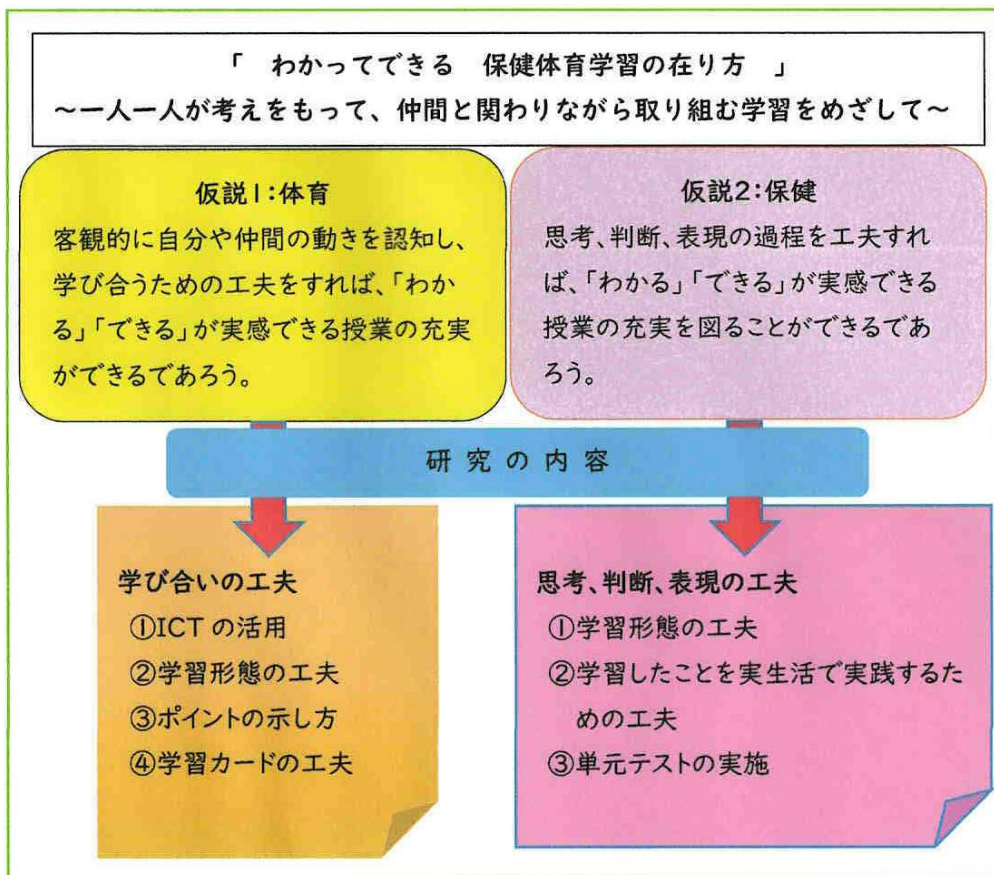
男女ともに「グループ活動」と回答した生徒が50%を超えている。その次に「ペア活動」と回答する生徒が多く、「友だちとの関わり」が不可欠であることがわかる。

【資料5】保健の授業で学習したことを実践していますか



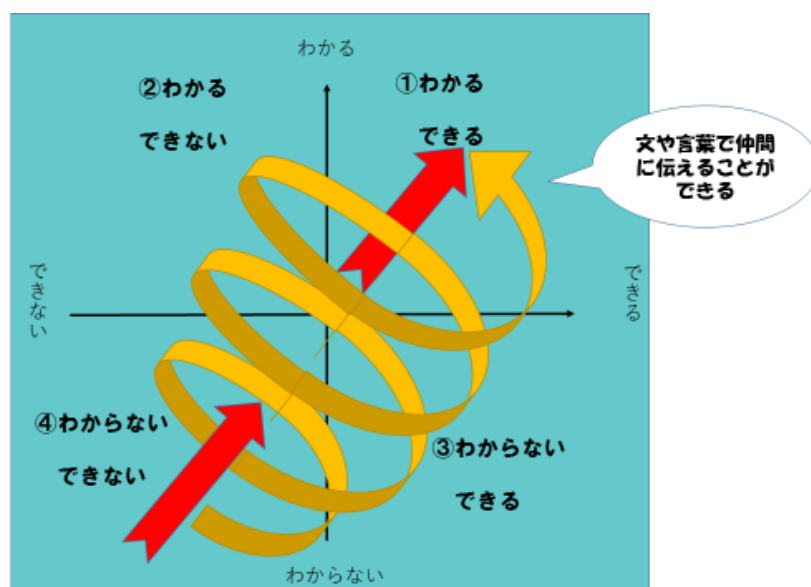
男子が約26%、女子の31%が「あまりしていない」「していない」と回答し、その理由の多くに、「実践するタイミングがわからない」や「忘れている」とあった。授業でより具体的に学習したことを実践できるような工夫が必要である。

III 研究の構想図



IV 研究の実際

本郡市では、「わかる」と「できる」の関係を整理するために、それぞれを縦軸と横軸にとらえ、目指す方向性として、1番目に「わかってできる」、2番目に「わかるけどできない」、3番目に「わからないけどできる」、4番目に「わからないし、できない」とランク付けをして分類した。「わかるけどできない」を2番目にした理由は、生徒たちの将来を見据えたとき、できることよりも、まずはしっかりと理解し、説明できる力をつけることが大切ではないかと考えたからだ。また、「わかる」の基準は「理解したポイントを、文や言葉で仲間に伝えることができる」とした。



1 客観的に自分や仲間を認知し、学び合うための工夫

(1) ICTの活用と学習カードの工夫

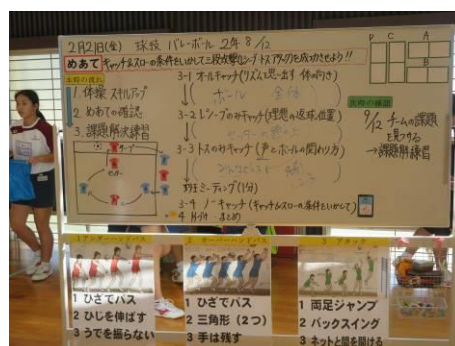


生徒たちは、実際に動画等で自分の動きを客観的に見ることで、自分がイメージしていた動きとのズレに気づくことができる。動画での自分の動きと自分のもつイメージとのズレに気づくことは、教師が言葉で伝えるよりも印象は強く、どのように改善しなければいけないかをより具体的につかむことにつながった。また、見直すことができるため、どのように改善したかを見比べることにより達成感をより高めることとなった。

お互いの動きや班の動きを撮り合う活動では、班の課題を明確にすることができるように指導するとともに、課題解決に向けての練習方法や工夫していく点を考えることができるよう学習カードの工夫を行った。話し合いの視点をしっかりもたせることで、話し合い活動がより充実し、短時間で済ませることができた。

授業の終末では振り返りとして「①わかってできる②わかるけどできない③わかっていないけどできる④わかっていないし、できない」を生徒に自己評価させることにより、根拠となる理論や技のポイントが「わかる」ことを意識できるよう工夫した。

(2) 技のポイントの示し方



技術の習得・向上には技のポイントを理解することが不可欠である。本郡市では、さらに押さえたい技術については常に確認できるように資料を貼り出したり、動画で流し続けたりして、いつでも正しい動きを生徒が確認できるよう工夫を行った。また、1年時に全員が購入している副読本の活用にも力を入れ取り組んでいる。副読本には、歴史やルール、技のポイントだけでなく、練習方法など様々な内容が記載されており、いつでも手に取って確認できる生徒の最も身近にある資料と言える。

2 思考、判断、表現の工夫

(1) 学習形態の工夫

今回、本郡市では保健学習の学習形態として、知識構成型ジグソー法を取り入れ研究を行った。

初めのうちは、提示された資料から要点を読み取り理解することや、その内容を班員に的確に伝えること、内容や疑問を議論することが難しか

【資料6】知識構成型ジグソー法

学習形態の工夫

○知識構成型ジグソー法

- ①エキスパート活動 (資料を理解する)
- ↓
- ②ジグソー活動
(課題解決に向けて意見を出し合う)
- ↓
- ③班でまとめる (資料を根拠に発表する)
- ↓
- ④クロストーク
(班の内容や疑問を全体で議論する)

った。

何度も繰り返し学習することはもちろん、教師側が資料提示の仕方や議論する内容を整理することで、生徒たちの思考もスムーズに流れるようになった。何よりも生徒同士が活発に意見を出し合うことができるようになった。



(2) 実践するための工夫

芦北水俣郡市では、保健分野における表現を自分の言葉で相手に伝えることはもちろん、「実生活で実践すること」とも捉えた。【資料5】で示したように、男子が約26%、女子の31%が「あまりしていない」「していない」と回答し、その理由の多くに、「実践するタイミングがわからない」や「忘れている」とあった。

そこで、授業の中で実践することがきるよう、「自分の生活を振り返る時間の設定」「課題解決のための手立て」「実践方法の提示」の工夫を行った。学習内容によって、養護教諭とも連携し授業を行った。養護教諭の視点から話をさせていただくことにより、学校生活の様子などから、より一層「自分の生活を振り返る」ことができたり、「課題解決のための手立て」を養護教諭からアドバイスをもらって考えたりすることができた。

「実践方法の提示」では、「〇〇3か条」などを考えさせ、より実践しやすいように工夫した。また、自分のことだけでなく、学習したことを家族にも伝え、家族みんなで健康な生活を実践することができるよう、教師自身が生徒のゴールの姿を意識した授業計画を立てることも大事な工夫である。

(3) 単元テストの実施

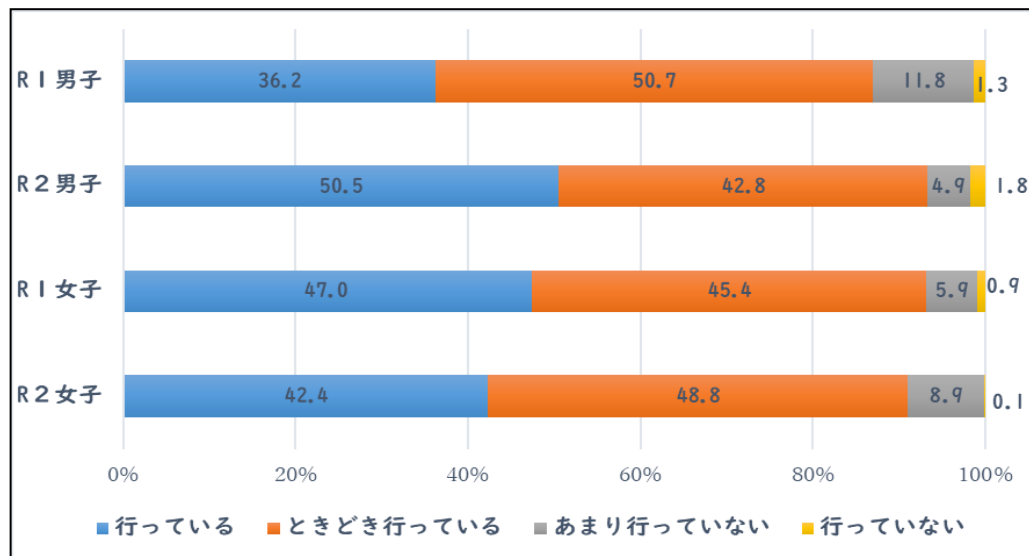
知識ならびに思考力、判断力、表現力が授業をとおしてどれくらい高まったかを生徒も教師も知るために実施することにした。しかしながら臨時休校等により、思うように授業ができない中での検証は困難であったので、今後さらに継続し、研究を進めていく。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 体育分野

【資料7】運動を行う際にポイントを理解して行っていますか（比較）



今年度実施した「保健体育の授業に関するアンケート（本郡市8校）」の結果から、「運動を行う際にポイントを理解して行っていますか」の回答に、男子が約6%（-7%）、女子が約9%（+3%）の生徒が「あまり行っていない」「行っていない」と回答した。男子は前回「行っている」と回答した生徒が約36%だったが、今回約50%と高くなっており、運動をする際、ポイントを意識して行うことの重要性を理解しつつあることが窺える。逆に女子は、「行っている」と回答した生徒が、今回約5%減る結果となった。これは、今までポイントを理解して行っていたつもりだったが、今回の取り組みを通し、「理解することとはどういうことなのか」ということを改めて考えたのではないかと考察した。本郡市としては、この結果も研究の成果ではないかと捉えている。

(2) 保健分野

学習形態の工夫として、知識構成型ジクソー法を取り入れ研究を行った。学習形態に生徒が慣れるまでがとても大変だが、資料からポイントを読み取り、整理し、仲間に自分の言葉で伝え、内容や課題解決について議論する生徒たちの姿は明らかに成果として伝わってくる。今後も郡市で協力して資料等を準備していくことでより多くの単元で実践していきたい。

2 研究の課題

今回、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休校や、7月の豪雨災害等で授業はもちろん、グループ活動が行えず、研究主題に迫る取組が十分であるとは言えない。しかし、来年度から完全実施される新学習指導要領や「熊本の学び推進プラン」の1つである学習構想案について研究することができたことは本郡市にとって大きな財産である。

研究に関しては、まだまだスタートしたばかりであり、これからも新しい生活様式を意識しながら様々な検証を行い、生徒一人一人の「わかって」「できる」保健体育の学習をめざして研究を進めていきたい。